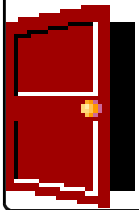


令和5年度《昨年度に続き、今年度も読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

No. 28

桑村小学校令和5年6月20日 文責佐藤

活字が大好き

覚えている読書の記憶で一番古いのは、保育園でお迎えを待っているときに本を読んでいたという事です。題名も内容も覚えていませんが、わたぐもくんが冒険するお話だったと思います。毎日読んでいたのですが、お迎えの時間が早くいつも最後まで読み終わらせませんでした。続きから読めばいいものを、なぜか毎回1ページ目から読み返していたのです。とうとう我慢ができなくなってお迎えを遅くしてもらった日、最後のページまで読み終わった達成感だけはなんとなく覚えています。

家にある本は、手当たり次第なんでも読んでいました。他にも木登りやお絵かきなど好きなことはありましたが、読書は好きというより常にしているもの、という感覚だったと思います。活字ならなんでも良かった子供時代に比べ、大人になってからは読む本が減ってきましたし、好きなジャンルばかり読むようになりました。

子供時代の読書で後悔していることは、記録をつけていなかった事です。当時の私はとにかく1文字でも多く読みたかったので、書く事や作者に興味がありませんでした。気に入った本の事は、ずっと覚えていられると思っていました。大人になってからもう一度読みたいと思った本がたくさんあります。しかし、実際に探し出せたのはほんの少ししかありません。題名だけでも記録して残しておけば良かったなあと、つくづく思います。

見つけた本の1冊を紹介します



『西風のくれた鍵』アリソン・アトリー／作 岩波書店

妖精たちと美しい森、荒々しい荒野が登場する童話集です。1年に1度だけ訪れる幻のスパイス売りのおばあさん、動物の言葉が分かる妖精のスカーフを拾った少年、いたずらピクシーのおよめさんになった少女、冬の王と女王の子供にふさわしい子供を探している北風などが登場する話が6話載っています。

子供の頃に読んでいたものとは翻訳している方が違い、評論社から出版された『妖精のおよめさん』が実際に読んでいたものでした。桜の花びらで作ったドレスと、スパイス売りのおばあさんが歌っている歌が、この本発見の鍵でした。

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」(6月20日号)を読んでの感想

()年()